

高等学校での英語文法指導の工夫

キーワード: 文法、日本語訳

山本 幸一

1. はじめに

平成 25 年度より施行された新高校学習指導要領英語の要点は、「4技能を総合的に育成する」と「授業は英語で行うことを基本とする」である。英語運用能力に向けた実践的訓練が一層重視されることとなった。しかし、文法指導の重要性が低下するわけではない。音声活動に力点を置くには、文法指導の改善による「効率的学習」が必要だからである。ところが、学習英文法を見ても、高校生がすんなり理解し、実践に役立てられるような解説ばかりとは限らなく、所々に改善の余地が見つかる。2～6節では、なぜ文法指導か、英語教育を巡る状況について概観した後、7節で、文法の解説例を議論する。

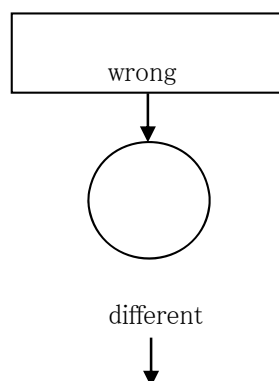
2. all in English (実践的訓練への傾斜)

(1) 従来の方に対する捉え方の違い

(a) 従来の方が間違っているという捉え方

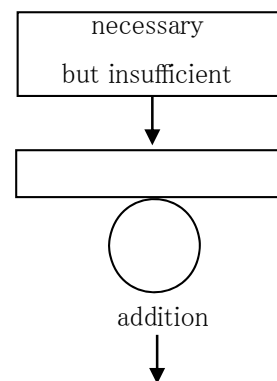
(b) 従来の方が不足しているという捉え方

(指導要領の考え方)



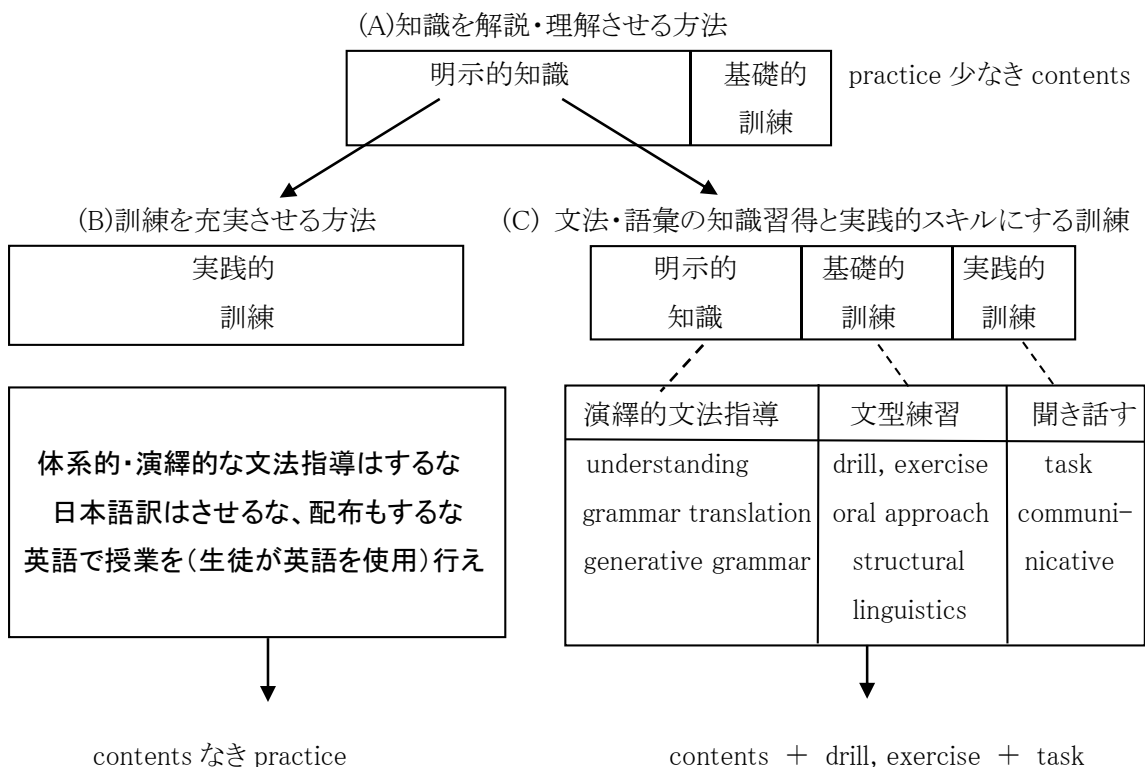
throw out the baby with the bathwater

(教育現場の主な考え方)



necessary and sufficient

(2) 将来学習の発展が期待できる方法は？



3. all in English の問題点

(1) 体系的な文法の指導を行わないで、英語の学習が積み上げられるのか？

筆者は「現在完了という概念を使わずに指導して下さい。」と言われたことがある。文法用語の問題ではなく、集中的に明示的に文法指導をするな、という意味である。しかし、授業で帰納的に習得させることは期待できない。自然な発話を膨大に聞いて規則が抽出できる母語環境と違い、外国語環境では、演繹的・意識的学習を省くことはできないからである。高校によっては、英語表現 I の週2時間を、日本語で文法の指導を行っていると聞いている。全国的にも、文法演習中心の教科書の採用率がトップである。現場の認識では、文法分野別に系統的に文法を理解させ、文型練習をさせるのが効率的指導であり、このプロセスを省いては、外国語環境においては、英語が整理されて吸収・蓄積され難い。文法項目が入り交じり、同一文法項目を散発的に学習しては、知識が有機的ネットワークに育たず、無秩序に蓄えられる。また、生徒が家庭学習、更には自立して、文法書を紐解いて生涯学習をするには、系統的な文法知識と文法用語・文法概念の基礎的理解が欠かせない。母語話者は高校卒業までに約6万数千時間英語に触れるが、日本の中高の英語の授業は 900 時間である。このギャップを埋めるには、概念的理解という「加速装置」が必要である。新指導要領作成に当たった中心的人物によれば、「英語科の目標はコミュニケーション能力の育成一点のみ」、「5年後、10年後、20年後の生徒の姿を思い起こして、必要性を考えてほしい」等で

ある。そうであれば、授業が contents (語彙、構文、文法等の基礎知識) なき practice であってはならない。スポーツ・楽器の演奏でも、「基礎的訓練」の繰り返しが必要であり、それを省いて試合や演奏会という「実践的訓練」はできない。同様に、英語も、「基礎的訓練を通して、必要な構文が半ば自動的に口から発せられるレベル (quick comprehension and response) を目指してスキルアップすることが前提であり、そのようなプロセスなくして、相手の発話を理解し、自分の考えを組み立てて伝える「実践的訓練」は可能とはならない。

(2) 日本語(訳)を排除して学習効果が上がるか？

今時、和訳一辺倒の授業は聞かない。英語の語順で、意味のまとまり毎のセンスグループ毎の訳を活用して、英文理解をする方法が広まっている。多くの教員は予習プリントを工夫して、Question and Answering を通した内容把握をさせ、一部の複雑な構造の文のみの和訳による構造の理解をさせ、その上で、音読や、リスニング等、音声活動を取り入れている。筆者は「訳をさせない、事後にも訳を配布しないように」、「英和辞書ではなく、英英辞書を使って下さい」と言われたことがある。日本語の参照は構造の理解を深め、直読直解までの「補助輪」として有効であり、この「補助輪」を通して、抽象的で内容が高度なレベルの文章の読解も可能になる。 all in English では、i+1 の教材(現在より少し上のレベル)の教材が中心となるのではないだろうか。平易な文章を読むだけでは学校は見放されるであろう。更に、作文を考えてみよう。日常、日本語に囲まれており、日本語をシャットアウトすることができない中では、英作文とは、日本語で考えている内容をどのような英語で表現するか、を考える日英比較の地道なプロセスである。日英比較は欠くことのできない学習プロセスである。英語の発想を示す中間日本語も必要となる。基本語のスペルも不確かで入学してくる高校生も多い現実を直視すれば、英英辞典の前に英和辞典の活用に習熟することが必要である。

(3) すべての科目の授業を英語だけで行うことは現実的か？

一部の科目を英語で行うことの効果は理解でき、筆者も以前より、AET と共にそのような授業を行っており、平生も英語を部分的に取り入れて授業を行っている (partially in English)。問題は、「授業時間すべてを英語で」+「教師が英語を話すよりも、生徒に英語を使わせよ(60%以上)」+「英会話ではないレベル」+「すべての科目を英語で」+「すべての高校生対象に」という点である。指導要領の趣旨は、授業を英語で行うこととは、教員が一方的に話すことではなく、生徒が主体となって活動することである。新指導要領作成の中心的人物によれば、「いわゆる英会話をやってくれ、ということではない」、「高校三年次の・・・夏休み前には・・・例えば、国際的な問題についてディベートや模擬国連を実施できる・・・社会的な問題について、GTEC のライティングのグレード六レベルのエッセイを書けるようになる」といった目標設定をしてみるのもよい」ということである。1文の英文の作文に四苦八苦している高校生もいる状況では、All in English の方法は pidgin English の行き交う場となろう。すべての高校生に可能でもなく、効率良い方法でもない。学力、意欲、クラス規模、そして文法解説と文型練習を否定的に捉えることを鑑みれば、初歩的な英会話を越えた

レベルのコミュニケーションは至難である。また、4技能の全てを詰め込んだ授業では、目標が曖昧となり、どれもが中途半端に終わってしまう。それぞれの技能に focus して学習をする strategic な指導が必要である。更には、know how (発音記号の理解、辞書・文法参考書の使い方(基本的文法用語、概念の理解)、英語書籍、ニュース、インターネット、CD、DVD 等を利用しての学習方略)を伝えるのに、英語での説明を通した理解は至難であり、不自由な英語で説明すべき必然性もない。授業をいつもコミュニケーションの場にするのは現実的ではなく、コミュニケーションとして不自然であっても外国語学習としての効果を狙った方法があり得る。

4. 英語教育を巡る状況から考えられること

4.1 英語教育目的論

寺沢 (<http://d.hatena.ne.jp/TerasawaT/20121214/1355498593>) を参考にして、次の3つの原理 (A)-(C) を基にすれば、英語教育目的論を (1)-(4) のように分類できる。

- (A) 社会統計から、英語を必要とする人は少数である実態を深刻に受け止めるべき。
(成毛 (2011) では日本人の1割と報告されている)
- (B) 英語学習とは距離のある理念、例えば「教養」、「知的訓練」、「国際理解」などよりも、英語力の向上を第一義に考える。更に、
 - (a) 身につける英語力について、「実践的運用能力」として捉える。
 - (b) 身につける英語力について、「実践的運用能力」のための「基礎」として捉える。
- (C) 生徒を選別せずに、平等にすべての生徒に教える。

(A)-(C) を基にすると、これまでの英語教育目的論を次のように分類できる。(1)(2) が実用目的、(3)(4) が教養目的と言える。(1) は選別して英語を指導、(2)(3)(4) は全員を指導。

- (1) 少数エリートに集中的特訓(平泉渉等) (A, B(a))(エリート目的)
- (2) すべての日本国民に平等にハイレベルの英語教育をする(文科省アクションプラン等)。 (B(a), C)(国家総動員的)
- (3) 将来英語を使うかどうかは未知数なので基礎を学校で教える(山田雄一郎等)。 (A, B(b), C)(基礎教育的)
- (4) 「教養」等抽象的目的を設定(渡部昇一等) (A, C)(教養目的)

以上の目的論の分類を基に、英語教育を巡る状況について考えてみよう。

4.2 英語教育を巡る状況から考えられること

英語を職業として必要とする人が少数である事実は直視すべきである。将来、高度な実用的英語を必要とするのが高校生の一部であることを考えれば、英語学習の目的が実践的運用能力一点張りなのは現実的ではない。高校生全体に対する英語教育は、(将来英語を使用することになる可能性を想定しての)実践的運用能力の基盤の指導を主とすべきで、将来英語を必要とする専門職に就く決意の一部のグローバル人材候補に対するハイレベルの指導とは異なるべきである。「国家総動員的」目的論は根本的に問題である。また、大学受験と高校卒業が最大の英語学習動機であることを忘れて「受験英語」批評に終始すべきではない。これらの動機づけがなくては学習時間が低下するのは明らかである。ただ、古語、文章語と口語表現とを区別する等、「受験に特化した英語」(文法問題の欠陥)を改善していくことは必要である。

「文法の解説」、「センスグループ毎の訳」、「日本語での説明」は、実用的英語の習得を阻害しているところか「加速装置」、「補助輪」として不可欠な方法である。例えば、優れた文法訳読式学習参考書は、日本にいて確かな英語力を養成することに貢献している。英文解釈で有名な伊藤和夫氏は、自らの解釈法が、日本語に置き換えることが目的ではなく、直読直解や多読への具体的な道標を示していることを述べている。

全体をまず訳してから次に英文の内容を考えるのではなく、文の先頭から英文の流れにそって直読直解してゆくときの頭の働きがどのようなものかを分析した 『テーマ別英文解釈教室』

英文を左から右、上から下へと1度読むだけですまそうとする読み方とは具体的には何なのかを示すことに主力を向けています。文の先頭からはじめて、何を手がかりにどう考えるのか、どれだけのことが分 ければ長い文の全体を日本語に置きかえなくても英文は分かったとして先へ進んでよいのかを示そうとしている 『英文解釈基礎編』

筆者の経験でも、優れた英文法参考書、文法訳読式学習参考書、英作文参考書に負うところは多かった。自分のレベルとペースに合わせ、繰り返してトレーニングできる点において、学校の授業よりも頼りがいがあった。伊藤は、文法訳読法を批判する論者の多くは、批判に終始し、訳読に代わる新たな効果的方法を示しているわけではない、と述べているが、批判論者は「直読直解」、「多読」が大事だと唱えても、そこに到達するのに、どのように学習を積み上げるべきか具体的道程を示さない。同様に、「授業は英語で行うことを基本とする。教員が英語を話すのではなく、生徒に英語を使わせること。」と唱えても、1文の英文の作文に四苦八苦している高校生に、どうしたら英語が使えるようになるのか、具体的道筋が示されていない。筆者のライティングの指導からも、文法知識が、スキーマから具体的例文に渡るネットワークとして形成できている生徒は、誤文を作成しても、フィードバックして、その後の経験に生かせる。しかし、スキーマも具体的例文も定着していない学

力の低い生徒は、例えば、(1)のような誤文を作成しても、(2)を見てフィードバックできない。系統的に文法を理解し、文型練習をするプロセスが不十分であるため、根本的な構造の再指導が必要である。

(1) That is how Japanese cultural tradition has take over us is very good.

(2) That is why Japanese cultural tradition handed down to us is very good.

時間をかけて推敲できる作文においてこのようなレベルであれば、速いスピードで行われるオーラルでのやり取りは、一層困難である。コミュニケーション以前の、文法の学習と型に基づいた訓練不足が問題である。

日英比較は大事なプロセスである。それは日英対照学習だけでなく、母語による干渉という面でも意識させたい。米国に4年滞在し、大学に在籍している学生から research paper が送られてきたが、優れた英文で書かれていたが、次のような母語干渉の典型的な誤りがあった。

(3) You would do better to doubt that a person is lying.

それで、次のような説明と、簡単なテストを行った。

○×?	疑う(真実かどうか疑問を投げかける)	doubt
○?	疑う(怪しむ、嫌疑をかける)	suspect

真実を疑う場合、どちらの動詞を選んだらよいか。

(4) I (doubt / suspect) that he is telling the truth.

(5) I (doubt / suspect) that he is lying.

(6) I (doubt / suspect) the truth of his report.

また、英語が上達しない主要原因を指導法に帰すのも問題がある。「日本人が英語ができない根本的な理由は、英語などできなくてもなにひとつ不自由しない環境にいることにある(茂木弘道)」。「帰納的に文法を習得させる」、「訳は用いず英語で説明する」、「メタ言語を英語にする」は、日本の外国語環境では非現実的である。いったい、学習指導要領は日本での外国語学習や現場の状況を見ずに作成されたのであろうか? 英語の学習に naïve な一般と違って、学習指導作成者が naïve であるとは考えられない。「国際競争力をつけるためグローバル人材を育てよ」という産学官の声への対応が前面に出たものと思われる。確かに、英語下手で国益を損なわないように、一部のグローバル人材について高度な英語運用能力を目指した教育は喫緊の必要事項である。しかし、すべての高校生にとって、高度な運用能力の必要性はなく、また習得可能でもないことは明らかである。学習指導要領の照準は、文法の学習が家庭で自学可能な上位校において、一部のグ

ローバル人間育成のために高度な運用能力を目指すことに向けられているとしか考えられない。また、3節で触れたように、新指導要領作成に当たっての中心的人物の述べている次の言葉を見ても、この推測が見当違いではないことが分かる。「いわゆる英会話をやってくれ、ということではない」、「高校三年次の・・・夏休み前には・・・例えば、国際的な問題についてディベートや模擬国連を実施できる・・・社会的な問題について、GTEC のライティングのグレード六レベルのエッセイを書けるようになるといった目標設定を試してみるのもよい」。意欲と学力の高い生徒は、優れた英文法参考書、英文解釈参考書等によって自学自習が可能であり、授業での all in English による高いレベルのコミュニケーションやディベートに対応できる。しかし、「6年間勉強しても英語が使えない」という naïve な一般の声もあり、上位校と一般校との区別を明確にはできないのであろう。とは言うものの、一般校での困難は目に見えており、そのため、新指導要領に、「英語で行うことを基本とする」、「必要に応じて、日本語を交えて授業を行うことも考えられる」と補足したり、文法演習中心の英語表現1の教科書を検定で通過させたり(採用率は1社で46%)、現実的な道も開けてあるところであろう。何しろ、1982年の指導要領で英文法の教科書を廃止して以来、学校現場では、オーラル・コミュニケーションの時間等に、副教材によって文法の指導を30年もの間継続しているが、文科省はそれを黙認する形となっているのである。

一般校での all in English は不適切であり、愚直に額面通り受け入れても、学力レベル、学習意欲、授業外での努力等を考えれば、行き詰まりは明らかである。将来海外旅行で英語を使う程度にしか認識していない多くの生徒に、将来に向けての基盤はともかく、国際的な問題について英語でディベートができる高い英語運用能力を構築するためのモチベーションを期待することは難しい。文法を自学自習できない生徒の多い一般校では、「授業は英語で行うこと」は、額面通り受け止めるのではなく、その趣旨を汲み取り、学力に見合った現実的な方法で、理詰めでルールを学習する面と、練習によってルールを体得する両面を取り入れ、可能な範囲で英語を効果的に使用することを考え、実践的運用能力の基盤の指導とすべきである。また、「基礎的訓練」や「実践的訓練」の時間を取るため、文法内容を精選し、理解し易い解説への工夫が求められる。

5. 英語教育への不満とその理由

英語教育への不満は、大きく2点であろう。英語が聞けない、英語が話せない。これはどういうことであろうか。

(1) 英語が聞けない → これが最大の不満の理由と考えられる。

何年も勉強したにもかかわらず、ネイティブの英語を聞いて、It's all Greek to me. である。ナチュラル・スピードでの英語のインプットが足りなく、教室の英語は理解できても、ネイティブのスピード(思考の速さと同調)の英語である、英語圏のニュース、TVドラマ、洋画等の英語が理解できない。日本国内でのネイティブ、学習教材、ラジオやTVの語学講座の多くは極論すれば

不自然な英語(超低速、超明瞭)である。ネイティブ同士での自然なスピード、不明瞭さ、音の崩れに慣れるべきである。

例: ……min, (Coming), ……nai (Good Night), アリビア (I live here.)

(2) 英語が話せない

音声英語のインプットが不足、表現の音声としてのデータベースができていない。そのため、話すために必要な音声表現が取り出せず、日→英の quick response ができない。

中高での 900 時間では基盤を作ることで、その上に、英語運用能力習得に向けて重要な点は、多くのインプットをする(多読、特に多聴)ことである。それは次のような事実や主張からも分かる。

- (1)(a) 当該言語の母語話者は幼児期から膨大なインプットをして言語を習得する
- (b) 当該言語が話される国に住めば、言語の習得が速い
- (2)(a) 最初から「さあ動け、さあ動け」と強要しても仕方ない。「お腹に食物が入っていないければ動けない」。まず「食物を多く与えよ」。同時に「外国語学習の早い時期から、スピーキングやライティングの力を学習者に要求するな」Krashen
- (b) Listen more, speak less. Read more, write less.
- (c)「大量のインプット、少量のアウトプット」(白井恭弘)

ただし、インプットは comprehensible でなくてはならない
→ 聴いて 80%以上理解できるための基盤が必要

日本人教員の英語を聴かせるばかりでなく、CD、DVD 等の音源の活用が望まれる。高校生の多くが、基本的な発音の区別が習得できていないことから発音や聞くことの訓練は十分ではない。

例:the - za, sit - shitto, think - shiNk, London - RoNdoN, sing - shiNgu

視覚言語より音声言語の方が習得困難	読む・書く < 聞く・話す
自己のペースでコントロール不可能	話す < 聞く

言葉は「形式と意味」のつながりである。「音と概念」である。「音」も「概念」も、日英で大きく異なるが、共通部分もある。その異同について学ぶべきである。概念については、日常的なレベルほど日英で異なる面が大きい。例えば“Good Morning”(よい 午前でありますように)と「お早うございます」(今日もお早いですね)は発想が違う。しかし、抽象的レベルでは日英で共通する部分が多くなってくる。従って、高度な内容について達意の英文を書ける「英語の達人」についても、文化を色濃く反映する日常レベルの慣用句等については地道に習得するしかないし、「音」についても、英語の

音声に多く触れることなくしてはネイティブの言うことが聞き取れない。「音声と口語表現」が、外国語としての英語習得の最後の難関 (the final frontier) となる。

6. 実用的運用能力に向けて — 高校までの基盤完成後の大量インプット —

『思考と言語』において、ヴィゴツキーは、次のように述べている。発音は、外国語学習者にとって最大の難関であり、すばやい文法の適用をともなった自然な会話は、学習の最後でやっと達成される。母語の発達が自然な会話から始まり、自覚的な読み書きで終わるのに対し、外国語の発達は自覚的な読み書きで始まり、自然な会話で終わる。両者は、正反対の方向を向いている、と。

白井(2008)によれば

言語習得の一番大変なところは、リアルタイムでどんどん流れてくる音を、すぐさま意味として理解すること、そして、頭の中で言いたいと思っている内容を、音声言語としてもものすごいスピードで口に出さなければならないことです。つまり、スピードをつけて、意味と音声形式を結びつけるということを、聞くときも話すときもしなければならない。[...]では、どうすればそれができるようになるか。第二言語習得研究が出した答えは、「インプットを聞いて意味を理解することです。つまりどんどん流れてくる音を意味に結びつけるというプロセスが、言語習得の本質なのです。意味を音声で聞いて理解するプロセスなしに言語習得は起こらないというのが、第二言語習得研究の現在までの結論です。

学校卒業後も、英語の学習、特にリスニングが必要である。(study after school, lifelong study)

音声言語に習熟する必要 → スピード／音の崩れ・単語の句切れを越えた発音／口語表現

多くのインプットをするには、学校外(卒業後)の個人の努力が必要である。よく喩えられるが、スポーツも楽器も、体育や音楽の授業だけで到底身につかない。授業だけで、大会にもコンクールにも参加できない。同様に実用的な英語を身につけるには、限られた中高の授業 900 時間では完結しなく、音声インプットの時間が数千時間必要であろう。高校までの基盤の上に、study after school が必要である。英語を聴く人工的な母語環境を作ることが必要である。語学関係に進学する生徒や英語の学習意欲のある生徒には特に、「努力を継続して、字幕なしに洋画等の英語が理解できる」ことを体験させたいと考えている。

クラシック音楽の演奏家についての調査報告によれば、学生時代までにおよそ一万時間練習した人々は、地方のオーケストラの楽団員になれるレベルに達した。二万時間練習した人々は、同じプロでもより高いレベルに達し、有名オーケストラの楽団員になった。三万時間以上練習した人々

は音楽の世界で最高レベルの地位に到達した。才能を別にすれば、結局は取り組み時間が長いほど、上達するという。英語のリスニングについても、毎日の練習を何年も積み重ねることが必要である。

母語話者が英語に触れる時間	小学校入学までに約 2 万時間 高校卒業までに約 6 万数千時間
英語圏に1年暮らして英語に触れる時間	1年 3600 時間
中学高校の授業	6年間 900 時間
日本にいて毎日1時間リスニングをする場合	1年 360 時間

耳学問(聞くこと)による学習文法の精緻化や自己の表現データベースの upgrade をする必要。

○ TVドラマ、洋画から口語表現を学ぶ

What's up? [What's up with you?] Godspeed! You can make it.

Don't get me wrong. You don't say. Do you copy? I'd kill to

What's the catch? figure out (We have to figure out who he is.)

○学習英文法の精緻化(elaboration)

It was nice meeting you! お会いできて嬉しかったです *Me too.

7. 文法指導の工夫

学習英文法を見ると、高校生がすんなりと理解し納得でき、実践に役立てられる解説ばかりではない。所々に改善の工夫の余地が見つかる。特別の知識は持ち合わせず、分かり易い解説を求めて日頃考えてみた実践例を報告する。もちろん完成形ではなく、試行錯誤をして、より理解し易い解説を目指しての考察途上のものである。学習者が文法嫌いな理由は、面倒な規則を記憶しなくてはならないこと、機械的記憶をすることが多いこと、文法用語の分かり難さであろう。文法事項の整理と、文法構造の概念的成り立ちの提示、文法用語の解説に工夫の余地がある。表面的な規則の背後にある概念的な根拠を考えたい。ただし、学力レベルに合わせて段階的に精緻な説明にして行くこと(schematic から elaborate へ)、そして、言語学の追求が目的ではないので、できる限り単純明快な説明が必要である。

7.1 文法の自動化

分かり易い文法の解説を行い、生徒が理解することで学習が完成するわけではない。理解した言語表現が口をついて出てこなくては実用的とは言えない。自動化 (automaticization) のために、3つの目標を目指した基礎トレーニングが必要である。

A. direct association (直接連想)

英語の形式と意味を連結することである。訳という補助輪で理解しているものを、日本語の介在なくして、形式と意味を結びつけるには、音読やシャドウイング等の音声訓練が有効である。

B. quick comprehension (即時的理解)

英語の形式と意味の連結を高速化し、すばやく意味を理解するには、リスニング体験を多くもつことが有効である。

C. quick response (即時的反応)

英語の形式と意味の連結を高速化し、すばやく英語表現を産出するには、日本語訳を見て、すばやくそれを英語に直す訓練が有効である。

7.2 文法の理解を通しての「生産性」及び「正しい用法」

「生産性」 内部構造が理解できると、一つのユニットとして処理されている「慣用的表現」の段階から、生産性と融通性のある「構文」として活用できるようになる。

○Fancy meeting you here! (動名詞)

「～を想像してごらん→すごいことだ」という命令文に基づいた構文

○Here's looking at you, kid. 「君の瞳に乾杯」(Casablanca)

Here's looking at you. 「君を見ながら乾杯」(Here's [to you]. 君に乾杯 + 分詞構文)

「正しい活用」 文法的な理解によって、正しい用法が分かる。

I used to { get up early, *getting up early }. 助動詞

He objected to { *go there, going there }. 前置詞の目的語

I am used to { *get up early, getting up early }. 前置詞の目的語

the man { * who is knowing, knowing } the secret 現在分詞

7.3 will と be going to の使い分け、「単純未来」と「意志未来」という文法用語

be going to (=動いている → ～しようとしている →)～しそう、～するつもり

「前もって」という意味合いが入る

	未来(～だろう)	意志(～しよう)
will	単なる予測 It will rain tomorrow. 雨が降る だろう	その場での意志 A: The clock is broken. B: Really? OK, I'll get a new one today. 本当？それじゃ、買って こよう
be going to	(前もっての)兆候からの予測 It is going to rain before long. 間もなく雨が降り そう (雨雲などがある)	(前もっての)計画的意志 A The clock is broken. B Yes, I'm going to get a new one today ええ、今日買う つもり

7.4 多義の記憶

come on 来い、頼むよ、いいじゃないか、勘弁してよ、やめて、冗談だろう、頑張れ、元気を出せ

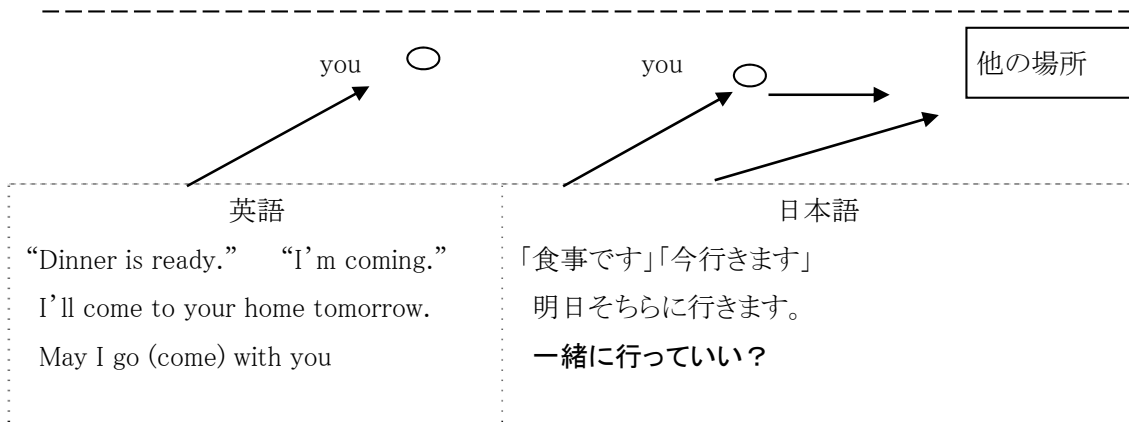
no way 嫌だ、信じられない、素晴らしい

come on	来い	(依頼)	頼むよ、いいじゃないか
		(逆の依頼)	勘弁してよ、やめて、冗談だろう
		(どんどん進む)	頑張れ、元気を出せ
no way	(方法がない)	(自己に対して)	嫌だ
		(他に対して)	信じられない → 素晴らしい

7.5 go と come の説明について

(1) go と come 日英での概念領域の区切り方の違い

来る	come
行く	go



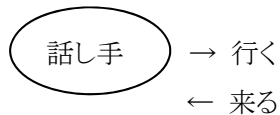
(2)従来の説明

話し相手のところに行く	= come
話し相手と一緒にところに行く	= go
(相手について行く意味の場合は)	= come

米国の友人に、日本にいる別の友人が君のところに行くよ
はどう表すのか？

(3) 改善点

日本語の使い分け



英語の使い分け



- | | |
|---|---|
| 1 | 「話し手と話し相手」から離れる場合
I'll () to the party tomorrow. |
| 2 | 「話し手と話し相手」同士が近づく場合
I'll () to your party tomorrow. |
| 3 | 「話し手」が「話し相手」と同じところへついて行く場合
May I () with you? |
| 4 | 第三者が「話し手か話し相手」に近づく場合
They'll () to your party tomorrow. |

I'm (coming, going) there next week. New York にいる友人に向かって

I (came, went) to your house, but you were out. 相手が不在だった場合

(Go, Come) to my office immediately. 教室で、教授に言われた場合

7.6 不定詞と動名詞の説明について

どのような動詞の次に不定詞、動名詞が続くのかということに対して、従来の説明では、それぞれの動詞のリストに終わるだけのものもあるが、他方で、不定詞、動名詞へと続く動詞の意味的特徴に基づいた説明がなされているものもある。後者の場合、次の2つの対立軸から分けている説明が多い。

- | | |
|-------------------|----------------|
| (1) 不定詞 未来志向 | 動名詞 過去、現在志向 |
| (2) 不定詞 希望(積極的意図) | 動名詞 反希望(消極的意図) |

高校低学年であれば、この理解でいいだろう。しかし、高学年になると、この説明では理解に苦しむことになる。なぜなら、動詞の一覧表を少し見れば、この対立軸による区分に合致しないケースがすぐ見つかるからである。

- | |
|--|
| (A) avoid, mind, suggest, try, look forward to は「未来」だが、動名詞が続く。 |
| (B) enjoy, look forward to は「反希望」ではないが、動名詞が続く。 |
| (C) fail, refuse, hate は「希望」ではないが、不定詞が続く。 |

高校生の多くは、「言葉は論理では割り切れない」と考え、機械的記憶をするであろう。しかし、指導する立場としては、高校の高学年では、これらの矛盾点をできるだけ解消し、すんなり理解し記憶できるように提示したいものである。そのため、(1)(2)の特徴づけを調整し直してみよう。

不定詞と動名詞の意味的特徴	
不定詞 to は「～に向かって」	
→ これから起きる動作を希望する	→ 未来 (希望)
動名詞 … ing は「～している」	
→ 既に起きている動作を 思い出したり、イメージする	→ 過去・現在・未来 (希望なし)

以上の特徴づけを図示してみよう。

不定詞、動名詞と過去・現在・未来

	過去	現在	未来
不定詞	/		→ (希望)
動名詞	~~~~~	~~~~~	~~~~~
(希望なし [希望ノーコメントも含む])			

動詞の性質によって、目的語として動名詞か不定詞か、いずれが続くか決まる。

<p>不定詞が続く動詞(これから起きる動作 を希望する)未来「希望」 want, hope, expect, promise, decide, agree, mean, offer</p>
<p>動名詞が続く動詞(既に起きている動作 を思い出す、イメージする 過去、現在、未来「希望なし」 (過去、現在) deny, excuse, admit, enjoy, give up, finish, stop, practice, imagine, consider (未来) (希望なし) mind, avoid, escape, put off, help, miss (希望ノーコメント) suggest</p>

(A) 2つの対立軸

1つ目の対立軸

「未来」対「過去」

Remember to meet me today.

Remember meeting me today.

2つ目の対立軸

「未来 / 希望」対「未来 / 希望なし」

He tried to write to her, but he could not.

He tried writing to her, but she did not reply.

「未来 / 希望」対「未来 / 希望なし」

He offered to help her.

He suggested going skiing.

(B) enjoy, look forward to は反希望ではないが、なぜ動名詞？

I enjoyed playing tennis.

I am looking forward to meeting you.

enjoy 「既に起きている動作としてイメージ」しているため「希望なし」。

to が希望を示し、動名詞自体は「希望なし」

(C) 次は希望ではないのになぜ不定詞？

→ 「希望」の意味があり、それを否定している。 動名詞の場合は、希望なし。

(自身の)希望の否定	
don't love to	I don't love to travel alone.
hate to	I hate to meet him.
希望の失敗	
fail to	I failed to meet him there.
	cf. I missed meeting him there.
	fail (希望に向かって力不足である)
	miss (イメージしたできごとを取り逃がす)

希望への障害	
hesitate to	I hesitate to ask you, but would you come next Monday?
(相手の)希望の否定	
refuse to	I refuse to help you.
decline to	He declined to comment on that.

8. まとめ

英語と日本語は言語的距離 (linguistic distance) の開きが大きく、対極的な言語である。その違いは、文法と音声の2面において見られる。明示的に文法や発音の違いを理解させ、その上で、訓練を通して自動化する必要がある。英語運用能力に向けた実践的訓練が一層重視されることとなっても文法指導の重要性が低下するわけではない。むしろ、音声活動に力点を置くためにも、文法指導の改善による「効率的学習」が必要である。ところが、学習英文法を見ても、高校生がすんなりと理解し、実践に役立てられるような解説ばかりとは限らなく、所々に改善の余地が見つかる。本稿では、文法構造や言語表現の概念的成り立ちを示すことを通じた説明の工夫について議論した。ただし、文法の解説は、説明が過度にならないように、学力者の学力状態に合わせて、段階的に精緻な説明にして行くこと (schematic から elaborate へ) が重要である。また、なぜ文法指導が重要か、文法指導が重要である文脈として英語教育を巡る状況についても概観した。

参考文献

- 江利川春雄(2012)「学習英文法の歴史的意義と今日的課題」大津由紀雄(編)『英文法を見直したい』研究社。
 大津由紀雄(編)(2012)『英文法を見直したい』研究社。
 岡田伸夫(2004)『英語教育と英文法の接点』美誠社。
 白井恭弘(2008)『外国語学習の科学 ― 第二言語習得論とは何か ―』岩波書店。
 白井恭弘(2012)『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店。
 成毛眞(2011)『日本人の9割に英語はいらない』祥伝社。
 茂木弘道(2004)『文科省が英語を壊す』中央公論新社。
 レフ・ヴィゴツキー(柴田義末(訳)(2001)『思考と言語』新読書社。)